

カルーアミルク×従順ペットの発情生活 コラボパロディ

文通—サンプル—

今日はとてもいい天気だ。陽射しもぼかぼかで風も穏やか。こんな日は外で折坂と遊びたいのだけれど、折坂はいつも通り仕事だから仕方がない。

外でボール遊びでもしようかな、と庭を眺めていると、玄関のチャイムが鳴った。

「わうっ」

「ああ、出てくるよ」

自分は玄関に行くわけにはいかない。でも、来客が誰なのかはどうしても気になる。

開いたままのドアの陰に隠れ、玄関から聞こえる声にそっと耳を澄ます。

「ああ、いつもお疲れ様です」

どうやら宅配便のお届けらしい。印鑑うんたらという声が聞こえて、玄関ドアの閉まる音。それから、折坂の足音が近づいてくる。

「わうっ！」

「ああ、出版社からの荷物だよ」

「わうううう！」

何が入っているのだろう。仕事のものだけのときもあるけれど、たまにおやつが入っていることもあるのだ。それらは編集さんからの差し入れだったりファンからの贈り物だったりするようなのだけれど、人間用のデザートは何でも美味しいし、折坂もたくさんくれるから。

「わうっ、わうっ！」

「ああ、ちよつと待って」

箱はそれほど大きくはない。もしかしたらおやつは入っていないかもしれないけれど、やっぱり贈り物って中が何なのか気になるものだ。ポストに入る茶色い封筒だともうでもいいけれど。

「ああ、頼んでおいた資料だ」

床に置かれた段ボール。覗き込むと、書類の入ったファイルと本しか入っていなかった。

「臯月、プリン食べようか」

苦笑され、頭を撫でられ。これではダダをこねる子供のようだけれど、プリンを貰えるのならまあいいか、とキッチンに向かう折坂の後に続いた。

「わうう……」

口内で転がすようにしながら味わったプリン。皿の中で湧き出て食べても食べてもなくならないプリンがあつたらいいのに。でも、もうない。何度皿を舐めようとも、嚙下したプリンは戻っては来ない。もうこれ以上は皿を見ても悲しくなるだけだ。だから早く片付けて、とアピールしようと折坂を見たら、笑っていた。ソファに座り、何か紙を見ながら折坂が笑っている。

「わんっ！」

楽しいことからのけ者にされたような気持ちで吠えると、折坂がこちらを向いた。

「ん？ ああ、これか。ファンレターなんだけど、面白くて」

（ファンレター……）

折坂は作家なのだから、そういうものを貰うことがあることくらいは知っている。それに毎回きちんと読んで、大切に箱にしまっていることも。でも、こんな風に笑いながら読む、なんてことは今まで見たことがない。

「わうう」

そんなに面白いものだったのだろうか。それならちよつと気になるな、とプリンのことも忘れて近付くと、読むか？ と目の前に手紙が置かれた。綺麗な文字。けれど読む気なんてない。

「わんわんっ！！」

「ああ、すまない、皐月は字が読めないんだっとな」

犬は字が読めない。本当なら会話だつて意味が通じないはずなのだけれど、折坂はゆっくり読んでくれた。

『折坂先生。私はデビュー作からずっと折坂先生のファンでした。ずっと小説以外は読まない人間でしたが、折坂先生がエッセイを書かれたということで初めて小説以外の本を手に取りました』

（エッセイなんて書いてたんだ……）

折坂の仕事内容については全く知らない。大変そうとか忙しそうとか、そう思うことはある。資料探して本を捲ったり、図書館や本屋さんに行つてくると出掛けて行ったり。けれど自分は犬だからいつだつてお留守番。寂しいけれど、服を着るくらいならクッションで丸くなっている方がずつといい。

『エッセイは初めて読む私でもとても読みやすく、先生の優しいお人柄が……』この辺は恥ずかしいから飛ばすよ。それで……ああ『先生が飼われている犬なのですが、もしかして彼は人間なのではないでしょうか』

「ぶふっ！！」

「こら皐月、汚いよ」

「わん……」

ごめんなさい、と頭を伏せる。けれどなんで知っているのだろう。いや、エッセイを読んでいるから折坂がどういふ内容をどういふ表現で書いたのかは分からないけれど、それでも普通人間を犬として飼っているなんてことは書かないだろう。というか、出版社が止めそうだ。

『もし違っていたら申し訳ありません。私がそう思ったのは、私自身、同性の恋人に犬として飼われてみたいと思つたことがあるからです。もし折坂先生のペットが人間の男性ならば、彼はきつと心の底から幸せだと思います』

そして、これからも応援しています、という文章で締めくくられていた。

「どうかな、皐月、幸せかな」

「わん！！」

バレたのは衝撃だったけれど、この生活を幸せだろうと思ってくれる人がいるというのはとても嬉しい。それに、他人にこの生活を羨ましがられているというちよつとした優越感。好き好き、と心を込めて膝に頬をすり寄せると、折坂はたくさん頭を撫でてくれた。

「よかった。俺も幸せだよ」

嬉しくなって、折坂の膝に前足を置いて。上体を折坂の方に寄せると笑いながらのキス。それは発情させないやつだったけれど、心が満たされているからか不満には思わなかった。

それから数か月後、また折坂が手紙を読んで笑っていた。

「わん！」

「前回の読者さんからだよ」

だと思った、と頷く。ソファにゆつたりと座る折坂の足元に伏せれば、頭を一撫でした後にファンレターが読み上げられた。

『折坂先生。こんにちは。お返事をありがとうございました。とても嬉しくて暗記するほど何度も何度も読み返しました。今は大切に宝箱に保管し、家事の合間に読み返しています』

宝箱！　なんて何て素敵なものを持っている人なのだろう。皐月はいつも大切なものは中庭の大きな木の下に埋めている。皐月の大切なものを折坂は取り上げたりしないのだけれど、なんとなくそこに埋めておくと安心するのだ。折坂も知らないはずの秘密の場所。

『折坂先生の飼っている犬というのは本当に人間だったのですね。雄犬と書いてあったので、男性ということには驚きませんでした。先生が幸せそうな様子が伝わってきました。最近作風が少し変化したなと思っていたのですが、それはきつと先生から溢れ出る幸せによって、なのです。ね』

「わん！」

「うん、皐月がいて幸せだよ」

「わんわん！」

（僕も幸せ！）

折坂の膝に前足を乗せて身を乗り出す。キスのおねだりだと思つたららしい折坂が顔を近づけてきたので、ペロペロと顔を舐めた。好き、大好き、嬉しいのアピール。

「ふ、皐月、落ち着きなさい」

そう言いながら折坂はこにこしてくる。怒つたりもしないし、無理にやめさせようともしない。好き。

「続きを読むよ。』先生からのお返事をいただいて、私も勇気を出してみようかと思いました。恋人はおおらかな人で、いつもありのままを受け入れてくれる人です。無理強いをしたりもしないところが好きなのですが、やはり犬として扱われてみたいです。サツキくんが羨ましいです。また、お手紙を書きます。これからも応援しています』

「わんっ！！」

「この子も立派な犬になれるといいな」

「わんっ！！」

休日の午前。朝食の片付けを終えてソファでコーヒーを飲んでいると、篠崎が新聞をテーブルに置いた。でもまだ読み終えてはいないはずなのにどうして——休日はいつもゆっくりとコーヒーを飲みながら隅々まで読むのに。

「諒」

両手で持っていたマグカップをテーブルに置き、右側に座る篠崎に向き直る。

「はい？」

「どうした？」

「え？」

「……おいで」

引き寄せられ、腕の中に納まる。そして腰に回された腕によって導かれ、膝の上に座った。

「どうしたかな。今日は甘えたい気分かな」

何も言っていない。ただ考え事をしながらコーヒーを飲んでいただけ。なのにどうして篠崎にはすぐに分かってしまうのだろう。嬉しいけれど、そんなに顔に出ているのかと思うと恥ずかしい。

「ここでこのまま抱っこがいい？ それともベッドでハグしようか」

本当に優しい人だ。それにこのあとの時間をくれるらしいということも分かり、話すなら今かな、という気になる。

（緊張するけど……）

でも——。

「……あの、お願いがあるんです」

「うん、何だろう」

篠崎は嬉しそうに微笑んだ。優しい。きっと、言っても拒否はされないとと思う。けれど拒否されない。ひかれたいのではない。篠崎は優しいから、無理をしても安西の希望を叶えようとしてくれる。それが分かっているからこそ、言っているのか分からなくて。

「……もし、その、嫌だったたり無理だったたりしたらそう言ってくれたらいいんですけど」

「うん」

ちら、と篠崎を見る。やはり優しい顔。大丈夫と自分に言い聞かせ、それでもやはりどうしても恥ずかしくて、俯いたまま呟くような声で言った。

「犬になってみたいんです……」

約1万7千文字です。全年齢。宜しくお願い致します。